

# 巻頭言

## 「2本の映画」

理事長 新谷 友良

久しぶりに2本の映画を見ました。1本は「ペンタゴン・ペーパーズ 最高機密文書」、もう1本は「ウィンストン・チャーチル／ヒトラーから世界を救った男」、どちらも今年のアカデミー賞受賞作でご覧になった方も多いのではないかと思います。新聞などの映画評がどのように書いているか読んでいませんが、非常にメッセージが明確な映画と感じました。

「ペンタゴン・ペーパーズ 最高機密文書」は、監督がスティーブン・スピルバーグで、メルル・ストリープとトム・ハンクスとが共演しています。それだけでも話題性が大きいですが、アメリカ国防総省の秘密文書の存在と、それを報道しようとするワシントン・ポストという道具立てが加われば、現在のアメリカの政治情勢への明確な立場が窺えます。映画の終わり近く、機密文書の紙面への掲載が決まり、輪転機が回り始めるところ、刷り上がった新聞がトラックに載せられ配送される場所、郊外の家の前庭に出来立ての新聞が投げこまれる場所は、緊迫感と喝采感が満ちています。民主主義復権へのアメリカ社会の飢餓感が表れている場面でした。

もう1本の「ウィンストン・チャーチル／ヒトラーから世界を救った男」は、ドイツ軍の進撃で大陸のイギリス軍が全滅の危機に瀕している状況を背景に、ウィンストン・チャーチルのイギリス首相就任からダンケルクの戦いまでの4週間を映し出したものです。「ドイツとの和平交渉ではなく、徹底抗戦」を主張し孤立するチャーチルを取り巻く家族・議員・国王、そして国民の反応が交錯します。不信任を突きつける議会への演説の前に、ロンドンの地下鉄の中でのチャーチルの問いかけに、「徹底抗戦を！」と答えるロンドン市民とのやり取りが非常に印象的です。EU 離脱の日が近づいて、今回イギリスが行った選択が「光栄ある孤立」かどうか、揺れ動くイギリスはチャーチルに、そしてダンケルクの戦いにその回答を求めざるを得ないのかもしれない。

アメリカ・イギリスといった民主主義の本家本元で、このようなある意味では分かりやすい映画がつくられるのは、それだけ民主主義の危機があからさまに見えてきたということでしょうか？ この2本の映画は、日本でも何回か興行成績ベスト10に入っています。昨今の政治状況が、このような映画との共振を生んでいるようです。